ネット社会なら孔子はどう生きるか

人間文化研究所長　**やまだあつし**

「子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎」（子曰く、学びて時にこれを習う、またよろこばしからずや。朋あり遠方より来る、また楽しからずや）。『論語』冒頭の語句である。

孔子が生きた中国の春秋時代は戦争があり、孔子自身も『論語』子罕篇で「子畏於匡」（先生は匡というところで危ない目にあい）、衛霊公篇で「在陳絶糧」（陳というところで食糧が無くなり）とあるように危機に遭遇した。病気はどうか。孔子が重病で弟子たちが葬儀の準備をした（が回復した）話が子罕篇にあるものの、伝染病に罹った話はなく天寿を全うした。しかしながら、当時も虐疾（マラリア？）の記録はある。原因がわからない中で多数の死者が出たことは想像に難くない。平時であっても、交通は未整備で通信手段も乏しい。そもそも紙も鉛筆も発明されていない。そのような時代だからこそ、学ぶことの楽しさ、遠くの友人と会う楽しさは格別であろう。

孔子が今、生き返れば何と言うだろうか。2020 年にもアゼルバイジャンとアルメニアの間で戦争はあったが、生き返ったのが生誕地と同じだとすれば平和だろう。新型コロナが猛威を振るっているが、ウイルスの正体は解明されている。孔子なら身を慎めば大丈夫と考えるだろう。学ぶ手段は多く、通信手段も多い。PC 画面から幾らでも検索ができる。孔子なら画面を一日中、見続けるだろう。直接的な対面は制限されているが、遠方とのやり取りは簡単となった。晩年の孔子は教育に勤しみ、『史記』「孔子世家」によれば弟子 3000 人と伝えられる。孔子が生き返ったらオンライン授業の手法を学んだに違いない。孔子は弟子に応じて教えを変えていた。今なら学務情報データベースを構築し、過去の指導記録を参照するのだろう。

冒頭の語句には続きがある。「人不知而不慍、不亦君子乎」（人知らずして怒らず、亦君子ならずや）。世間から知られなくても怒らない、という意味である。孔子が生き返ったら、この箇所は修正するかも知れない。人の動静は把握されるようになった。監視カメラが林立する中国は論外にしても、どこに何人いて先週より何人多い少ない、なら日常的に報じられている。考えはどうか。ブログで、ツイッターで、誰もが考えを世界中に広めることができるようになった。特に学問で身を立てようとすると、誰がどこで何を書いたか喋ったか、すぐわかる時代である。少なくとも孔子とその弟子のような立場で「人不知」はない。あるのは、人にしろ、考えにしろ、正しく理解されない（しようとしない）である。

自分たちが考える正義を絶対視し、違う考えを理解する努力をしない人が多い。トランプに扇動されてアメリカ議事堂へ突っ込んだ人々について、孔子は何と言うだろう。文化大革命期の中国で「批林批孔」（林彪と孔子を批判する）を唱えた人々への批評とともに、孔子から意見を聞いてみたいものである。